

第4回 People's Living Lab 促進会議 会議要旨

【日時】2020年2月28日（金） 10:00～12:15

【場所】大阪商工会議所 会議室（YouTube ライブ配信）

【出席者】（敬称略）

有識者：金出武雄、石川善樹、齋藤精一、竹林一、豊田啓介、牧村真史

講演者：岡橋寛明（みやこキャピタル(株)代表取締役パートナー）

石山洸（(株)エクサウィザーズ代表取締役社長）

野島学（関西経済連合会理事・産業部長）

河原源太（大阪大学理事・副学長）

（1）ご挨拶（石毛事務総長）

- ・ PLL というコンセプトを具体化するため万博で実現したいアイデアを募集し、最終的に491団体から1020件という多くの提案を頂き心より感謝している。
- ・ 今年は万博の基盤を作る年。日本中が万博への期待で盛り上がるように皆様のご支援、ご協力をお願いしたい。

（2）PLL 促進会議に関するご説明（森副事務総長）

- ・ アイデア提案募集では、491団体から1020件のアイデアを提案頂き、そのうち782件が単独法人、238件がコンソーシアムによる提案であった。
- ・ 提案内容の修正、更新の受付は3月末までとお知らせしていたが、3月27日17時までとしたい。新規提案は期限を設けず、今後も随時受付し続ける予定である。非公表の提案のうち公表可能なものがあれば、変更頂きたい。
- ・ 4月には中間報告をまとめ、その内容を基本計画に反映していきたいと考えている。4月以降はプロデューサーを選定し、BIEの総会に参加した上で、基本計画の策定という流れで万博について検討を進めていく。

（3）ご講演（みやこキャピタル(株)代表取締役パートナー 岡橋様）

- ・ みやこキャピタルは京都大学の公式認定ベンチャーキャピタルで、息の長い投資が必要なリアルテック領域に投資をしている。
- ・ 万博の企画については、PLL 促進会議のように企業等の意見を吸収して草の根でやっていることは良いことである。例えば、日本のお祭り、世界のお祭りなどは参加型であり、トップダウンではなく草の根のボトムアップの活動である。そういった活動は人々の記憶に残りレガシーになりやすい。そのため、万博もボトムアップであるべきである。

- ・ 万博として重要なテーマとしてマイノリティに光を当てるといふことがある。この文脈でイノベーションを捉え直すと、マイノリティであるベンチャー、若手アカデミア、斜陽産業（農業、地方産業）が下克上のマジョリティに変わっていくことと捉えられる。2025年大阪・関西万博ではそういったマイノリティに光を当てると良いのではないか。

（４） ご講演（株式会社エクサウィザーズ代表取締役社長 石山様）

- ・ 万博でレガシーとなるデータ収集という提案をさせて頂きたい。万博は戦略的にデータを獲得できるプラットフォームになり得ると考えており、実証実験を検討している。
- ・ 具体的には万博でヘルスケアデータを収集し、それをAIで解析することで課題を解決するようなサービスを想定しており、集まったデータやAIの解析に大手の企業やベンチャー企業、人が集まってくることで課題解決が進んでいくと考えている。
- ・ 例えば、次世代版ポケモンGOのようなもので、データを入力することでゲームにログインできるという形式を想定している。また、アバターがDNA情報といったデータの入力によって変化、進化し、健康情報に基づいて病気になるなどの仕掛けがあると健康増進につながる可能性もある。また、このゲームで得られたデータを食品、医療、製薬企業と一緒に活用を進めることで広く課題解決が期待できる。こうした企業とのコラボレーションによって、おもしろい実証実験ができればと考えている。

（５） パネルディスカッション①

- ・ トップダウンではなく、ボトムアップが重要であるということだが、ボトムアップを2025年大阪・関西万博で実現するとすれば何が必要なのか。ボトムアップを良しとして、バラバラな取組みが生まれて結局それらが繋がらず成長しないという可能性はないか。
- ・ DNAデータをとりに行くインセンティブとして、面白いコンテンツを考えるということがある。そのアイデアを募集するものとしてPLLがあると思うが、どのように座組をデザインしていくべきか。
などのディスカッションがなされた。

（６） ご講演（関西経済連合会理事・産業部長 野島様）

- ・ 関経連は1300社の企業で形成されており、PLL提案についても多くの企業が提案されている。関経連にはイノベーション、魅力向上の委員会をつくって検討を進めている。特に万博をめざしてどのようなまちづくりをしていくのか、関西のアセットをいかしてどのように打ち出していくのか、関西広域での盛り上がりとともにSDGsに向けた機運醸成をどのように推進していくのかということを検討している。

- ・ データ利活用の基盤となる都市 OS について考えている。様々なデータを統合する都市 OS をベースにサービスを提供していく。様々なデータを集約する都市 OS をベースに万博期間中だけでなく、万博前からデータ利活用を進めていければと思う。
- ・ 官民一体の運営組織(夢洲マネジメント&コーディネートオーソリティ(通称:YMCA))を立てて、都市 OS 運営を目指し、万博後のレガシーにも繋げていく。

(7) ご講演(大阪大学理事・副学長 河原様)

- ・ 大阪大学の理念、大阪大学憲章として、「いのち」にむきあい、「いのち」をまもる、はぐくむ、つなぐ、という視点から社会課題の解決に取り組む大阪大学として、社会に貢献していくことを目指している。このように、大学が考えている部分と万博が考えている部分が合致している。
- ・ 万博の場では、最新の技術を課題と合わせて紹介できるとよい。それを踏まえて未来社会をともに考えて構想していくということを提案したい。また、ぜひ学生、若者が参画できるようにすることが重要である。
- ・ モノから体験へ、ヒトから若者へ万博ではシフトしていくと考えている。
- ・ 大阪大学の取り組み(都市型デジタルヘルスケアコミュニティ構想)等についてご紹介。

(8) パネルディスカッション②

- ・ 市民から信頼をもってデータを集めるには、規制をつくるだけではなく、万博でのデータ活用を通じてより良い社会を構築していこうという機運をつくらなければならない。
- ・ 未来社会を構想する取り組みに市民、若者が参加することは重要で、万博を契機に巻き込んでいくことは重要。これまでの技術では問題解決の方法についてのアイデアが言葉で終わってしまっていたものが、AI が出てきて実際にどう実施するのかシミュレーションできるようになってきている。そうした最新の技術も含めてどのように仕組みを考えるか。
などのディスカッションがなされた。

以上